

257
3
201

新宮涼園編述

實弗的里亞論

完

起號堂藏版



特 30 三
707

新宮涼園編述

實弗的里亞論

完

起號堂藏版

正誤

九丁裏九行十七段

(サ)ハ(十)ノ誤

十丁表一行八段

(ソ)ハ(シ)ノ誤

十三丁表三行面瘡ノ間ニ(、)ヲ脱ス

十八丁裏九行二十段

(躰)ハ(躰)ノ誤

二十一丁表七行十六段

(躰)ハ(躰)ノ誤

二十七丁表四行十二段

(幟)ハ(騙)ノ誤

喉症論

實錄

咽喉火毒論

咽喉火毒之病。外有一種之氣。而內感之。其發也如
火藥走火。其焦而脫。使人不暇措手。人唯知其急劇
致死。而未知其病如何也。小兒多感之。呼爲馬痺風。
其發大人者。百中之一二耳。是世人之所以未審其
症也。蓋其致害如蝮蛇狂犬。未有其毒流而不及周
身者也。豈獨咽喉焦而脫。勢至五體皆脫。患者必見
敗尿微脈。是其徵也。故爲之治者。擊而除之。理而収
之。間不容髮。宜如捧漏沃焦。不及則斃。醫唯以尋常
纏喉風待之。雖欲不誤。不可得也。吾故表而錄之。以

代醫按。示世醫之不知者。

右ノ論ハ祖父鬼國山人ノ草スル所ニシテ三十年前ノ作ナリ山人ノ所謂咽喉火毒トハ則チ今ノ實弗的里亞ナルヲ論中自ラ瞭然タリ三十年前家祖既ニ本病ヲ辨論ス余輩愚孫ノ通ニ及ハサル所ナリ感歎ノ餘卷首ニ掲テ以テ序文ニ代フト云爾

明治三十年三月三日

新宮涼園誌

凡例

一此書ハ府下開業醫ノ大集會筵ニ於テ余カ演說セシ所ニ實弗的里亞ノ要領ヲ畧述スル者ナリ素ヨリ草々ノ起稿ニシテ敢テ梨棗ニ災スルノ意ナシト雖モ姑ク聽客ノ請ニヨリテ之ヲ世ニ公ニス編中訛謬ノ如キハ後日チ埃ヲ訂正ス可シ

一書中ノ論說ハ專ラ歐米諸大家殊ニ普。尼。斯。丹等ノ書ヲ折衷シテ編述セシ者ナレハ決シテ一家ノ私言ニ非サルナリ

一此書稿成ルニ當テ信長坪井翁ノ一閱ヲ煩ハ
シ頗ル論理ノ品位ヲ増ス者アリ
己卯上巳
涼園又識

實弗的里亞論

東京 新宮涼園編述

異名附名義

實弗的里亞トハ、彼紀元一千八百二十一年、佛國
有名ノ醫士、貌列頓尼氏ノ始テ命名セシ所ニシ
テ、皮若クハ膜ノ義ナリ、是ヨリ先、本病各國ニ流
行セシトアリテ、年代、國土ノ異ナルニ由リ、諸種
ノ名稱ヲ附セリ、曰埃及病、曰矢里亞病、曰惡性咽
喉炎、曰瘰癧狀咽喉炎、曰窒息病、曰縊喉病、曰惡性
咽喉潰爛、曰流行格魯烏弗、曰疳蝕性咽喉炎、曰腐

敗性咽喉炎、曰義膜咽喉炎等是ナリ、輒近又實弗的里知斯ノ名アリ、(蓋シ知ストハ炎證ノ義ニシテ、則チ義膜炎ノ謂ナリ、實弗的里亞ト義相同シ、猶肺炎ヲ涅烏母尼亞、或ハ涅烏母尼知スト云フカ如シ)以上數種ノ名稱アリト雖モ、方今各國醫人ノ通稱スル所ハ、則チ實弗的里亞ナリ、余モ亦之ニ倣フテ、本編標題ニモ實弗的里亞論トハ題セシナリ

履歷

實弗的里亞ハ、往古ヨリ醫家ノ能ク知ル所ノ一

病ナリ、其最モ古キ所ヲ温ヌレハ、紀元第一世、今ヲ距ルテ大約一千八百年前ニ於テ、大醫亞列黜斯氏ハ、業ニ己ニ此病ヲ研究シ、之ヲ埃及病ト名ツケ、其證狀ヲ著書中ニ明載セリ、爾後史載ノ據ル可キ者ナキテ久矣、紀元一千五百年代ノ頃ニ至リテ、往々歐羅巴、及北亞米利加ニ流行セシテ、諸書ニ見ヘタリ、然レモ本病ヲ實弗的里亞ト唱ヘテ、其病性、原因等ヲ講究スルニ至リシハ、實ニ一千八百二十一年、佛國ニ流行シ、同五十五年、第一月英國ニ流行セシ時ヨリ以降ニシテ、爾後今

日ニ至ルマテ、凡ソ二十有七八年間ハ、各國共ニ
實弗的里亞ノ慘毒ヲ蒙ラサル所ナシ、故ニ學者
益焦思苦慮シテ其原因、病理ヲ講究シ、輒近漸ク
其端緒ヲ闡クニ至リシナリ、今日ト雖モ未タ本
病ノ原因、病理、及治法等確說アラサルナリ、本邦
ニ於テ、實弗的里亞ノ實弗的里亞タルヲ領知ス
ルニ至リシハ、僅々數年ニ過サルヲ以テ、今日尙
其病證ヲモ知ラサルノ人アリ、或ハ實弗的里亞
ハ、近年初メテ歐米ヨリ輸入シ來レル一新病ナ
リト看做ス者アリ、然レモ卑見ヲ以テ考フレハ、

本病ハ決シテ新病ニ非ラス、其名稱新ナルノミ、
假令史記ノ以テ徵ス可キナキモ、本邦實弗的里
亞ノ艦艦ハ、數年前ノ近キニ非サル可シ、何トナ
レハ初メ埃及及矢里亞ニ發セシ者、數百年前、既
ニ大西洋ヲ航シテ、亞米利加ニ至リシヲ以テ考
フレハ、又山嶽ヲ踰ヘテ、亞細亞ノ東岸ニ來リ、早
ク已ニ日本ニ來着セシト疑フ可ラサレハナリ、
又亞米利加ニハ、自然ニ本病ヲ發生セシナリ、埃
及ヨリ傳搬セシニ非ラストセハ、本邦ニモ、亦古
來既ニ本病ヲ發生セント謂フモ不可ナキナリ、

從來本邦醫家ノ咽喉丹毒、走馬喉風、及馬痺風ト唱ヘシ疾病中ニハ、又此實弗的里亞ヲモ併稱セシト、疑ヲ容サルナリ、譬ハ猶窞扶斯、泰斐士ノ如キモ、之ヲ一新病ト看做シ、未タ其證狀ヲ詳悉セサル者アリト雖モ夫ノ陰陽二證ノ傷寒中ニハ、又此二病ヲ併稱スルト、知ルヘキナリ、故ニ余ハ實弗的里亞ハ、新奇ノ一病ニ非ラス、唯其名稱新ナルノミト謂フナリ

種類

實弗的里亞ヲ別ツテ四種トス、曰單純實弗的里

亞、曰格魯烏弗性實弗的里亞、曰糜爛性實弗的里亞、曰惡性實弗的里亞是ナリ、然レモ是畢竟本病劇易ノ差異ニ由テ別ナシノミ、病性異ナルニ非サレハ、其各種ノ記載ヲ要セサルナリ、且桑田衡平氏譯述セル内科摘要ニ、各種ノ證狀ヲ列載シテ自ラ明瞭ナリ、故ニ復贅セス、閱者宜シク該書ニ就テ參考ス可シ

發病年齡

實弗的里亞ハ、主オモニ小兒ノ所患ニシテ、大率子二歲至十歲ノ間ニ發スル者ナリ、而シテ一歲以內

ノ小兒ニ在テハ、其齡愈少キ者ハ、此病ニ罹ルコト愈、罕ナリ。初生四個月内ノ兒ハ、之ヲ患フルコト極メテ稀ナリ。然レモ初生三閱月ノ兒ニシテ、本病ニ罹リシ者アリト云フ、又學士斯密斯氏ノ實驗說ニ曰、初生六週日ノ小兒ニ於テ、余ハ其咽内ヲ檢シテ、兩扁桃腺上食鹽ヲ摻佈スルカ如キ白點ヲ目撃セリ。因テ直ニ格魯兒酸剝篤亞斯ノ溶液ヲ、局所ニ塗抹セシカ、僅カニ兩三日ニシテ全ク平癒セリ。但シ兒ノ兄、數日前、實弗的里亞ニ罹リテ斃レリ故ニ該兒モ亦實弗的里亞ニ罹リタル

コト疑フ可キニ非サルナリト、又此病ハ、間中年以上ノ人ニ發スルコトアリト雖モ、老人ハ決シテ本病ニ罹ルコトナシ、茲ニ學士挖昆乙篤氏ノ表記セル四百六十二證ノ比例ヲ舉ケ、以テ年齡ノ老幼ニ由リ、本病ニ罹ルノ差異アルヲ示サン

五年以下ノ者	百四十八人
五年、至十年ノ者	百十二人
十年、至十五年ノ者	八十六人
十五年、至二十年ノ者	四十六人
二十年、至三十年ノ者	三十二人

三十年、至四十年ノ者 二十八人
 四十年、至五十年ノ者 八人
 五十年、至六十年ノ者 一人
 但シ此中婦人ハ男子ヨリ多シ

潜伏期

本病ノ潜伏期ハ、二三日乃至八九日ノ間ニ在リ、
 學士斯密私氏ノ實驗說ヲ以テ之ヲ證セン、但シ
 此說ハ、實弗的里亞ノ一家族ニ傳播スルノ景況、
 及其各證發顯ノ時期ヲ示ス者ナリ、一貴女榮氏、
 一千八百七十四年、十一月十一日ヨリ、同十三日

マテ、他人ノ家ニ在テ實弗的里亞患者ノ看護ヲ
 爲シ、患者死スルノ後、自宅ニ歸レリ、同十五日晚
 景ニ至リテ、少シク咽喉痛ヲ覺ヘ、次日ハ實弗的
 里性義膜ヲ、扁桃腺上ニ發生シ、十九日ニ至リテ
 全治セリ、二十日ニ至リ其妹同證ニ罹リ、三四日
 間、局所療法ヲ施シテ、又全治セリ、然ルニ十二月
 二日ニ至リ榮女ノ一子、又本病ニ罹レリト云フ、
 此三人ノ本病ニ罹リシ時日ヲ見レハ、其潜伏期
 ノ長短自ラ分明ナリ

原因

本病ノ原因ハ、曖昧模糊トシテ、未タ一定ノ論ナク、大ニ碩學大家ノ神思ヲ惱殺セシ者ナリ、或ハ之ヲ「ミヤスマ」ナリト云ヒ、或ハ之ヲ「バクテリヤ」ナリト云ヒ、或ハ之ヲ一種ノ小菌類ナリト云ヒ、或ハ之ヲ一種ノ特異原ナリト云ヒ、異論百出、孰カ是ナルヲ知ラス、余之ヲ熟考スルニ、第四說、則チ一種ノ特異原アリテ本病ヲ發スト云フノ說、最モ取ル可キニ似タリ、何トナレハ異論喋々自家ノ所說ヲ主張スト雖モ、各說自ラ一理ナキニ非ラストスレハ、各說自ラ真正ナラサルヲ証ス

ルナリ、故ニ確乎不拔ノ一原因ヲ探偵シ得ルマテハ、一種不可識ノ特異原アリト云フノ說、最モ妥當ナレハナリ
獨乙ノ醫家烏兒埜爾氏ハ、臨床ノ實驗並ニ下等動物ノ試驗ニ於テ、本病ノ原因ハ、運動自在ナル微細ノ活物ナリ、即チ「バクテリヤ」ナリト云ヘリ、但シ此「バクテリヤ」ハ、碩學今氏ノ說ニ據レハ、四種ノ別アリ、四種又各數類ニ小別スト云フ、而シテ烏兒埜爾氏ノ所謂本病ノ原因タル「バクテリヤ」ハ、球狀「バクテリヤ」ト、棍狀「バクテリヤ」トノ二

種ニシテ、殊ニ球狀「バクテリア」ハ、專ラ寶弗的里亞ヲ起ス者ナリト云ヘリ、抑モ此說ハ、管ニ烏兒埜爾氏ノミナラス、同國ノ醫武兒氏、彪埜兒氏、及歐米有名ノ顯微鏡學者モ、亦之ヲ主張スル者多シ、某氏ノ說ニ據レハ、寶弗的里亞ハ、小菌類ニ由テ發スル者ナリト、此說モ亦一理ナキニ非ラス、總テ寶弗的里亞ハ、最下等ノ植物ヲ發生スルニ便ナル地、即チ陋隘汚穢ノ房室、或ハ陋巷小街、或ハ糞壤ヲ堆積セル卑濕ノ土地等ニ多シ、是寶弗的里亞ハ、菌類ニ由テ發スルノ說アル所以ナリ、尙

大同小異ノ諸說アレドモ、緊要ナルニ非ラス、茲ニ尼墨兒氏內科書中ニ就テ、本病ノ原因論ヲ抄譯スルヲ左ノ如シ
流行性寶弗的里亞ハ、感^イ染^ン傳^ハ染^シ病種ニ屬スル者ニシテ、又最モ著明ナル直^コ接^ダ傳^シ染^シ病ノ一證ナリ、或ハ之ヲ「ミヤスマ」性病ト云フ說アレドモ、我日耳曼國ニ於テ其流行ノ景況ヲ察スルニ、「ミヤスマ」ノ說甚ダ疑フ可キナリ、抑寶弗的里亞ノ傳染毒ハ、義膜、及剝脫セル咽頭粘膜ト、患者ノ呼吸トニ留舍スル者ナリ、故ニ醫家藥液ヲ局所ニ塗擦シ、

或ハ喉頭截開術ヲ行フノ際、誤テ患者ノ呼氣ヲ吸引スレハ、病毒ニ感染スルノ懼レアリ。慎マサル可ケンヤ、實ニ良工國手ノ施術中、身ヲ實弗的里亞ノ犠牲ニ供スル者、問之アルハ、道ノ爲メ最モ愛惜ス可キナリ。此他何等ノ景況ハ、病毒ヲ傳搬スルノ媒タルヤ、病毒傳染ノ強弱何如、及甲乙丙三人ノ内、甲ノ病ヲ乙ヨリ傳ヘテ、丙ニ感染スルモ、却テ乙ノ之ニ感スルコトナキヤ否等ハ、後來ノ研究ヲ要スルナリ。又實弗的里亞ニハ、自ラ一種ノ素因アリ、其威力甚タ強大ナル者ナリ、而シ

テ小兒ノ大人ヨリ此病ニ罹リ易スキハ、小兒ハ素因ヲ具フルコト、大人ヨリ多キニ由ル者ニ非ラス、全ク小兒ハ病毒ニ暴觸スルノ多キニ由ル者ナリ
以上尼墨兒氏ノ説ト相反シテ、米國ノ大醫普林篤氏曰、實弗的里亞ハ特發スルコト極メテ罕ニシテ、其發スルヤ必ス流行スル者ナリ、而シテ他ノ流行病ノ如ク、自ラ一種ノ特異原因ヲ有シ、且一種ノ補因ヲ要スル者ナリ、此原因ハ、直接傳染毒ナルヤ、將感染力「ミヤスマ」ナルヤ、疑團ニ屬スト

雖モ、從來學醫ノ說ク、啗ニ據レハ、斷然之ヲ直接傳染病ナリト云ヒ、且其証ヲ示ス者アリ、然レモ本病流行ノ際ハ、直接シテ傳染セシヤ、或ハ別ニ病毒ヲ感受セシヤ、明ニ之ヲ識別シ得サルナリ、故ニ病毒傳染ノ疑問ハ、姑ク之ヲ不定ニ措テ、一決セサルモ敢テ不可ナキナリ、然レモ徒ラニ病者ニ直接ス可ラサルハ、固ヨリ預防ノ一大要件ナリト、普林篤氏ノ傳染性ヲ疑フテ之ヲ決セサルハ、蓋シ事物ヲ輕信セサル大家ノ見サル可ケレモ、實弗的里亞ノ如キ、慄悍獍猛ナル一病ハ、之

ヲ傳染病ト看做ンテ、畏避スルヲ要トス、蓋シ本病ヲ傳染病ニ非ラスト謂ハ、或ハ之ヲ輕視シテ不測ノ大害ヲ釀成スルヲナキニシモ非サルナリ、故ニ余ハ此傳染性ノ問題ニ就テハ、只管尼墨兒氏ノ說ニ左袒スルナリ

病理

本病ノ病理ハ、又猶其原因ノ如ク、諸說紛々、或ハ之ヲ全身汎發病ナリト云ヒ、或ハ之ヲ局所病ナリト云ヒ、未タ一定ノ論ヲキナリ、余敢テ甲乙ヲ可否スルヲ能ハス、彼此ノ取捨ハ、全ク讀者ノ意

見ニ任スルナリ、總テ事物ハ平淡公正ノ心ヲ以テ見サレハ、或ハ一方ニ偏倚スルノ弊ナキヲ能ハサルナリ、心中全身病ノ思想ヲ収メテ、局所病說ヲ見レハ、其非ナル所ヲ看破シテ、其是ヲ認メス、心中局所病說ヲ養成シテ、全身病說ヲ見レハ、又其非ヲ看破シテ、其是ヲ認ムルヲ能ハス、古ノ奇談アリ以テ偏倚ノ弊ヲ矯正スルニ足ル、曾テ二勇士アリ、一盾ヲ隔テ東西ニ立テ、甲士乙士ニ謂テ曰、此盾金ヲ以テ製セリ美ヲラスヤト、乙答テ曰盾ハ銀製ナリ、焉ソ之ヲ金ト云フ、甲曰子誤

レリ、黄色ナルヲ以テ我之ヲ金ト謂フナリ、乙曰盾白色ナリ、故ニ我之ヲ銀ト云フナリ、甲曰金ヲ以テ銀トスルハ虚言ナリ、汝我ヲ愚弄スルヤ、乙曰咄汝何言ヲ吐クヤ、大丈夫豈虚言セシ、盾銀ナレハ則チ我之ヲ銀ト云フ、汝自ラ虚言ヲ爲シテ、却テ人ノ言ヲ虚ト云フ、罪許レ難シト、爭論時ヲ移シ決セス、遂ニ決テ干戈ニ訴フルニ至レリ、豈圖ランヤ、此盾甲ニ向フノ一面ハ金鍍ニシテ、乙ニ向フノ一面ハ銀鍍ナリキ、然ルニ甲乙ノ二勇、各偏見ヲ主張シ、議論遂ニ争鬪ニ至リシナリ、實

弗的里亞ノ病理ヲ研究スルモ亦是ト同ノク、全身病說ニ耽醉セス、局所病說ニ深淫セス、平淡公正ノ心ヲ以テ、兩說ヲ翫味シ、而後其所得ノ學識ヲ平素ノ實驗ニ參考シ、以テ一定ノ病理說ヲ立テシトナシ、是余カ讀者ニ切望スル所ナリ
佛醫貌列頓尼氏曰、實弗的里亞ハ一個ノ局所病ナリ、然リ而シテ其蔓延傳播スル所以ハ、全ク本病ノ爲メニ發生スル所ノ分泌物ヲ、他ノ柔軟ナル粘膜ニ沾接スルニ由ルナリト、貌氏一旦此說ヲ主張セリト雖モ、爾后又全身ノ血毒證ハ、本病

ノ主眼タル可キ一病候ナルヲ確信スルニ至レリ、英國有名ノ治療家單涅兒氏モ亦實弗的里亞ハ、一種ノ血毒病ニシテ、速ニ經過ヲ終ル者ナリト云ヘリ、又普林篤氏モ同シク全身病說ヲ主張セリ、其論ニ曰、實弗的里亞ハ、著明ナル全身病ニシテ、其義膜性炎證ノ如キハ、全身血毒ヲ局所ニ標示スル者ナリ、此病ニ於テモ亦猶他ノ全身病ニ於ケルカ如ク、病理ノ眞面目ハ、血質ノ變敗ナリ、然レモ其變敗ノ景况何如ハ、未ダ之ヲ説明スルヲ能ハサルナリト、又曰實弗的里亞ハ、局所

ノ證狀ヲ發スルノ前、既ニ全身諸證ヲ發スル者
 ナレハ、局所ノ證候アリテ、而後全身諸證ヲ發ス
 ト謂テ得サルナリ、且又全身諸證ハ、屢、局所證狀
 ト對稱セサルコトアリト、又曰或ハ實弗的里亞ノ
 局所證狀ハ、其劇易大ニ本病ノ輕重ニ關涉スル
 者ナリ、是則テ本病ハ局所病タルノ證ナリト云
 フ者アレトモ、豈此一事實ヲ以テ、局所證候ハ全
 身病ノ一現證ナリトノ說ヲ辨駁スルニ足ラシ
 ヤト

以上全身病說ヲ論了スレハ、以下局所病說ヲ件

說ス可シ

第一、實弗的里亞ハ、其初メ局所病ニシテ、病毒ヲ
 粘膜面瘡所、或ハ皮膚剝脫面ニ附着スルニ起
 因スル者ナリ、蓋シ病毒一所ニ附着スルニ當
 テ、速ニ適宜ノ局所療法ヲ施セハ、能ク病勢ヲ
 頓挫シ得テ、全身ニ累及スルコトナシ

第二、實弗的里亞ノ起原ハ、局所ニ在ルナリ、故ニ
 其病徵常ニ必ス呼吸、若クハ飲食ノ際、直ニ外
 物ニ觸接スル部ニ於テ發現スルナリ

第三、本病一旦局所ノ起原ヲ爲ス寸ハ、其病所ニ

アル淋巴管、或ハ毛細管、或ハ兩管ヨリ病機産
物ヲ吸攝シテ、病害ヲ全身ニ及ホス者ナリ
第四、實弗的里亞ノ義膜ニハ、常ニ必ス「バクテリ
ヤ」ヲ發見シ、而シテ全身諸證ハ「バクテリヤ」ヲ血
中ニ吸收スルニ由ル者ナリ

第五、急性頸腺炎、及頸蜂窠織炎ハ、實弗的里亞ノ
一大要證ナリ、何トナレハ此二證ハ、病毒淋巴
管ニ達スルノ徵ニシテ、全身中毒ノ前兆ナレ
ハナリ、蓋シ此證ト、本病咽喉炎トノ關係ハ、猶
下疳ト便毒ト相關涉シ、手腕ノ瘡腫ト腋下腺

炎ト相關涉セルカ如ク然リ

第六、實弗的里亞ノ病毒ハ、肺ヨリ全身ニ滲入ス
ルコトアリ、曾テ醫士覇乙滿氏ノ實驗セシ所ナ
リ、故ニ本病ノ全身中毒ヲ發スルハ、一ハ粘膜
皮膚ヨリ病毒ヲ吸收シ、一ハ肺臟ヨリ之ヲ吸
収スルニ由ル者ナリ

第七、病毒何如ノ方法ニ由リテ体内ニ入ルモ、必
ス其威ヲ咽頭ニ呈スル者ナリ、故ニ咽頭炎ハ
本病最第一ノ早徵ニシテ、且最モ恐ル可キ者
ナリ

上文論述セシ所ヲ以テ見レハ、實弗的里亞ハ畢
竟全身病アリテ、而後局所ノ滲出物ヲ起ス者ナ
ルヤ、將局所ノ滲出物アリテ、而後全身病ヲ發ス
ル者ナルヤ、余ハ未タ之ヲ一定スルコト能ハス、恰
モ雲霧ノ間ニ彷徨スルノ想アルナリ、然レモ一ハ
クテリヤノ説、若シ十分ノ試験ヲ經ハ、恐クハ原
因病理ノ一定説ヲ出サン

解剖的徵候

本病ニ於テハ、最初必ス咽頭、殊ニ扁桃腺及軟口
蓋ニ、義膜ヲ生シ、或ハ喉頭ノ後部、口蓋弓、及全口

蓋ニ蔓延スルコトアリ、但シ蔓延セル義膜ハ、或ハ
一齊ニ遍佈スル者アリ、或ハ處々ニ散佈スル者
アリ、其狀一ナテズ、抑、最初義膜ヲ生スルヤ、其以
前先ツ紅ヲ咽頭ニ潮シテ、左右扁桃腺、或ハ一方
ノ扁桃腺腫脹シ、次テ半透明ノ薄キ義膜ヲ生シ、
速ニ不透明トナリ、次第ニ厚強ト爲ルナリ、而レ
テ此義膜ハ、初メ白色、或ハ灰白色ナルモ、後其腐
敗スルニ由リ、或ハ血液ヲ吸収スルニ由テ、黯色
若クハ黑色ニ變ス、其他藥液ノ爲メニ變色シ、或
ハ吐物ノ爲メニ變色スルコトアリ、其厚薄色質等、

全ク羊皮紙、若クハ軟革ニ仿類スル者ナリ、試ニ
 鉗子ヲ以テ之ヲ剝離スレハ、其面出血スル者アリ、
 義膜若シ黯黑色ニシテ、厚ク、且粘膜ニ密着セ
 サルキハ、其狀恰モ潰爛、若クハ壞疽ノ如シ、是レ
 壞疽狀咽喉炎、潰爛性咽喉炎ノ名アル所以ナリ、
 尼墨兒氏ノ說ニ據レハ、此義膜ハ、粘膜表面ノ壞
 疽ヨリ生スル者ナリ、而シテ其壞疽ハ、粘膜實質ノ
 纖維滲出ニ由テ、榮養脈管ヲ壓迫スルニ起因シ、
 或ハ粘膜ノ組織原腫脹スルニ起因スト云ヘリ、
 是レ格魯烏弗ノ義膜ト異ナル所ナリ

實弗的里亞ノ險證ニ在テハ、其義膜咽喉頭、及口蓋
 ニ止ラス、左右或ハ扁側ノ前後鼻竅ニ蔓延シ、歐
 氏管モ亦時アリテ義膜ヲ生シ、頰内齒齦ニ波及
 シ、甚シキハ眼内義膜ヲ生シテ、所謂實弗的里性
 結膜炎ヲ起シ、以テ失明スルニ至ルコトアリト云
 フ、又義膜或ハ胃管、及胃ニ連及スルコトアリ、然レ
 テ蔓延證中、最モ恐ル可キハ喉頭ノ連累ニシテ、
 所謂實弗的里性格魯烏弗是ナリ、此證ニ於テハ、
 炎勢氣管ニ及ヒ、遂ニ氣管枝ニ至ルコトアリ、本病
 ハ斯ノ如ク咽喉頭ニ連係セル部位ヲ侵スノミナ

ラス、或ハ外聽道、肛門、陰腔、包皮ニ義膜ヲ生シ、或ハ皮膚ニ剝脫、水泡、潰爛、痕等アルキハ、皆之ヲ發スル者ナリ

尼墨兒氏曰、實弗的里亞ニ於テハ、往々脾臟ノ軟化、及變大ヲ致ス者之アリ、又腎臟實質ノ崩壞ヲ致ス者多シ、而シテ神經中樞、及其末梢ノ變化何如ハ、未タ之ヲ究明スルコト能ハスト雖モ、病後ノ麻痺ヲ以テ見レハ、必ス變調ヲ致スコト疑フ容レサルナリト、又曰血液變調ノ景況何如ハ、猶他ノ傳染病ニ於ケルカ如ク、未タ之ヲ詳悉スルコト能

ハサルナリト、斯密私氏曰、劇性實弗的里亞ニ於テ、患者窒息シテ死スルキハ、腎臟充血シテ、少シク變大スルコトアリ、是レ窒息ノ際、靜脈充血ヲ起スニ由ルナリ、患者若シ敗血證ヲ發シテ斃ル、キハ、腎臟甚シク充血シテ、或ハ出血スル者アリ、甚シキニ至リテハ、マルピギ球、及細尿管ノ上皮細胞、腫脹シテ崩壞スル者アリト、余按スルニ劇性實弗的里亞ニ於テ、尿中血球、蛋白質、及泌尿管ノ模型ヲ見ルコトアルハ、蓋シ此充血ニ由ル者ナラン、尼墨兒斯密私ノ二氏ハ、腎臟、脾臟等ノ變化

ヲ記載スト雖モ、普林篤氏ノ内科書ヲ見ルニ、實弗的里亞ニ於テ、其病徵トス可キハ、唯義膜ノミ、爾餘形器ノ變觀ハ、畢竟合併證候ノミ、本病ノ主徵ニ非ラスト云ヘリ、蓋シ卓見ナリ

現證 附經過

本病ノ證候ハ、各證甚シク其劇易ヲ異ニスル者ニシテ、從テ本病ヲ諸種ニ區別スルニ至リシナリ、前文種類ノ條下ヲ參看ス可シ
此病、或ハ惡寒發熱シテ、急劇ニ發スル者アリ、或ハ數日間身體違和ヲ覺ヘテ、徐々ニ發スル者アリ

リ、其狀一ナラス、實ニ初頭ハ其何病タルヤヲ認メ難キヲアリ、然レモ一旦本性ヲ顯スニ至リテハ、庸醫モ亦其診斷ヲ誤ラサルナリ
本病ノ汎發證候ニハ、頭痛、嘔吐、衰脫、煩悶、及筋肉疲衰等ヲ發シ、兼テ又腮角、頸圍ニ、硬強、微痛ヲ覺ヘ、顔面蒼白色ト爲ル者アリ、局所徵候ニハ、最初成形性滲出物ヲ、扁桃腺部ニ致シ、次テ漸ク上後部ニ蔓延シテ、後鼻孔ノ粘膜ニ波及シ、或ハ屢會厭部ヲ超ヘテ、喉頭及氣管ニ連累スルヲアリ、但シ此病ニ於テハ、最初咽頭ノ炎證ヲ發シテ、義膜

ヲ生スル者ナレモ、却テ疼痛ヲ覺ヘサル者アリ、
或ハ該部ノ知覺鈍麻スル者アリ、是レ時アリテ
本病ヲ看破シ能ハサルコトアル所以ナリ、又病毒
一タヒ喉頭ヲ連累スルニ至リテハ、格魯烏弗固
有ノ咳嗽ヲ發シ、音聲嘶啞シテ、呼吸困難、喘鳴、
音ヲ發ス、且此呼吸困難ハ、多少發作性ニ起ル者
ナリ、是レ喉頭諸筋ノ痙攣ニ由テ然ル者トス、又
本病ハ假令喉頭ヲ侵サ、ルモ、扁桃腺腫大ノ爲
メニ、壓迫セラレ、以テ呼吸困難ヲ誘起スルコト
アリ、故ニ音聲嘶啞セサル間ハ、病未ダ喉頭ヲ侵サ

、ルノ徵ナリ、醫家記臆スヘシ
脈搏ハ、疾數ナル者アリ、否テサル者アリ、或ハ病
初極メテ數脈ナリシ者、經過中遽カニ緩脈トナ
リ、甚シキハ平候ノ下ニ降ルコトアリ、又此病ニ於
テハ、脈搏柔軟力ナク、指壓之ヲ遏止ス可キ者ア
リ、是レ心臟微弱ノ徵ナリ、惡候トス
肌熱ハ通常劇甚ナル者ニ非ラス、或ハ全ク發熱
セサル者アリ、或ハ却テ微冷スル者アリ、病勢喉
頭ニ迫ル時ハ、膚色、殊ニ面色蒼白、鉛ノ如クナル
ニ至ル、最モ惡徵ナリ、而シテ此病ハ、他ノ急性傳染

病ノ如ク、皮膚ニ特異ノ疹ヲ發スルヲナシ
舌胎ハ、概シテ甚シカラスト雖モ、呼息頗ル惡臭
ヲ放チ、肺瘍、若クハ肺疽ノ疑ヲ致サシムルヲア
リ、流涎口外ニ溢レ、口鼻出血スル者アリ、又嘔下
困難、下利スル者アリ、共ニ惡徵トス
患者或ハ喃々譫語スル者アリ、或ハ兇暴ナル譫
妄證ヲ發スル者アリ、又搖擲、昏睡ノ證ヲ發スル
者アリ、而シテ搖擲ハ、經過中ノ早晚ヲ問ハス、之
ヲ發スルヲアレモ、昏睡ハ必ス瀕死ノ際ニ發ス
ル者ナリ、蓋シ本病ノ搖擲、昏睡ヲ發スルハ、恐ク

ハ全身尿毒證ニ罹ルノ徵ナリ
蛋白尿ハ、屢發スル所ノ一證候ニシテ、患者百名
中、五十名ハ必ス之ヲ發ス、但シ其量僅微ナルア
リ、過饒ナルアリ、一定セス、概シテ義膜廣大、頸腺
過腫ノ證ニ於テハ、蛋白分過剩スルヲ常トス、又
尿中泌尿管模型、或ハ血液ヲ混スル者アリ
實弗的里亞ノ經過ヲ別ツテ三期ト爲ス、曰第一
期一名前兆加答兒期、曰第二期一名狹窄期、曰第
三期一名窒息期、是ナリ甲ハ二日乃至四日、乙ハ
十二時乃至十四日、丙ハ二三時乃至二日間ナリ

トス、但シ、其第二期、二日ヨリ速カナル者ヲ、急性ト爲シ、六日以上ニ至ル者ヲ、慢性ト爲スナリ、本病ハ大抵二三週日間ニ經過ヲ終ル者トス、然レモ劇證ニ於テハ、僅ニ四十八時間ニシテ死スル者アリ、之ニ反シテ繼發證ノ爲メニ、在苒伏枕スル者モ亦之アリ

繼發諸證

貧血證、及全身衰弱ハ、病後苒在持續スル者ナリ、心臟衰弱ハ、時アリテ甚タシク、爲メニ卒倒シテ斃ル、トアリ、是レ或ハ心臟ノ麻痺ニ由ル者ナリ

リ、此他隨意筋、或ハ不隨意筋ノ麻痺ハ、本病繼發證中ノ最モ著明ナル者ナリ、殊ニ口蓋筋麻痺シテ、嚥下困難、或ハ飲食逆流ヲ致ス者多シ、普氏曰嚥下困難甚シキニ至リテハ、胃唧筒ノ使用ヲ要スル者アリ、如斯キ證ニ在テハ、食物喉頭内ニ陷入シテ、爲メニ頓死ヲ致ス、トアリト、蓋シ口蓋麻痺ヲ遺ス者ハ、言語鼻音ヲ發シ、呼吸音ヲ發スルナリ、又舌筋麻痺スル者ハ、舌言フ、ト能ハス、口筋麻痺スル者ハ口嘯ク、ト能ハサルナリ、又此繼發麻痺ハ、皆ニ咽頭、口蓋、口圍ノミナラス、更ニ四

肢ニ發スルヲアリ、且此麻痺ハ、必スシモ咽頭ノ
麻痺ニ次テ發スル者ニ非ラス、或ハ之ニ先ツテ
發スルヲアリ、但シ下肢ハ必ス上肢ニ先ツテ麻
痺スルヲ常トス、又運動諸部ノ麻痺スルノミナ
ラス、知覺モ亦大ニ麻木スルヲアリ、或ハ却テ知
覺過敏ヲ繼發スルヲアリ、普氏曰本病ノ麻痺ハ、
全ク官能的ノ麻痺ニシテ、形體的ノ麻痺ニ非ラ
ス、故ニ死後屍ヲ剖見スルモ、決シテ形體ノ變異
ナシ、而シテ患者幸ニシテ鬼錄ヲ免ル、者ハ、唯
一時ノ麻痺ヲ訴フルノミ、數月ノ後ハ必ス全快

ス可シ、然レモ此麻痺ハ、病理學上ニ關シテ、其景
況ヲ説明スルヲ能ハサルナリト、又曰實弗的里
亞ノ麻痺ハ、一種固有ノ證ニシテ、必ス固有ノ原
因アル者ナル可シ、何トナレハ他病ノ後ニハ、決
シテ官能的ノ麻痺ヲ遺サス、必ス形體的ノ麻痺
ヲ貽ス者ナレハナリ、或ハ其原因、尿毒證ニ在リ
ト云フ者アレモ、麻痺ハ却テ尿性ノ變化、則テ尿
毒證ニ併發セス、且尿毒證ハ、尋常搖擲、昏睡等ヲ
發スル者ナルニ、實弗的里亞ニハ、此二證ヲ發ス
ルヲ甚タ稀ナリ、是レ實弗的里性麻痺ハ、尿毒證

ニ因セサルノ證ナリト、說キ得テ妙ナリ
斯密私氏小兒病論ニ曰、實弗的里亞後、視力ノ變
常ヲ發スル者多シ、或ハ遠視、或ハ近視、或ハ重視、
或ハ黒内障ヲ發シ、又隻眼ノ瞳子散大、或ハ雙眼
ノ瞳子散大ヲ發スルコトアリ、然レモ此眼病ハ、患
者ノ体力復故スルニ從フテ、平癒ニ至ル者ナリ
ト、前文解剖的徵候ノ條下ニ、眼内義膜ヲ生シテ
失明スル者アリト云ヒシハ、此說ト相矛盾スル
カ如クナレモ、其實ハ然ラス、彼ハ病機ノ蔓延セ
シナリ、此ハ病後ノ繼發證ナリ、讀者混同スルコト

勿レ

預後

特發實弗的里亞、或ハ流行ノ末期ニ發スル實弗
的里亞ハ、流行旺盛ノ時ニ發スル者ニ比スレハ、
預後善良ナリ、概シテ本病預後へ吉凶ハ、局所病
患ノ輕重ニ準スル者ナリ、故ニ劇甚ナル咽頭炎、
廣大ナル義膜、及頸腺腫大等ハ、患者ノ體質強弱
何如ニ論ナク、危險ニ陷ル者ナリ、又炎證、喉頭及
氣管ニ波及スル者ハ、回復ノ望ナシ、余カ經驗中、
既ニ三兒ノ窒息シテ死セシ者ヲ見タリ、但シ其

一兒ハ叔父松山棟菴ト同診セシ者ニシテ、咽喉
ノ炎證、及義膜モ稍輕快ニ趣キシニ、不幸ニシテ
喉頭ノ炎威増盛シ、甚シク義膜ヲ生シテ、遂ニ窒
息セシナリ、又患者虚脱ニ陥ル者ハ、預後固ヨリ
不良ナリ、劇證ハ、初發ヨリ四十八時間、或ハ尙早
ク虚脱シテ死スル者アリ、如斯基ハ所謂惡性實
弗的里亞ト稱ス可キカ、實ニ病勢猛烈ニシテ、生
力之ニ堪ユルヲ能ハサルナリ、蓋シ如斯基急虚
脱ノ證ハ、罕ニシテ、大率チ患者漸次ニ衰弱シテ、
二週日ノ終期、或ハ三週日ノ初期ニ死スルヲ常

トス、又嘔吐スル者、下利スル者、衄血若ハ他ノ出
血アル者、脈搏弱數ニシテ不倫ナル者、皮膚厥冷ス
ル者、尿中多クノ蛋白ヲ含ム者、及搖擲、譫妄、昏睡
等ノ證ヲ發スル者ハ、其回復期ス可ヲサルナリ、
茲ニ醫家ノ記臆ヲ要スル一事アリ、不意ノ卒倒
是ナリ、普氏ノ如キハ已ニ二人ノ卒倒セシ者ヲ
見タリト云フ、蓋シ心臟右房中ニ血塊ヲ生シテ
然ルナラン、學士堡兒失私美依虞斯氏ハ、如斯基
急死ノ三證ヲ新聞紙上ニ掲載セリ、本病ノ麻痺
ハ、前文論述セシカ如ク、甚タ恐ル可キ者ニ非サ

レ也、咽頭筋麻痺シテ、嚥下困難ナル者ハ、榮養不足シテ、衰弱ニ陥リ、呼吸筋麻痺スル者ハ、呼吸困難窒息スルノ恐レアリ、又繼發性實弗的里亞瘡_瘡麻疹_瘡後等ニハ預後甚タ凶ナリ、何トナレハ患者ノ發_瘡スル者ニ先發病ノ爲ニ衰弱スレハナリ

察病

炎證、及滲出物ヲ生スル以前ハ、本病ヲ徵ス可キ特異ノ證狀ナシト雖モ、既ニ義膜ヲ發生スルノ後ハ、診斷固ヨリ難キニ非サルナリ、然レモ單純咽喉炎ノ多ク分泌物ヲ生スル證ニ於テハ、之ヲ

實弗的里亞ト誤認スルヲナキニ非ラス、蓋シ分泌_瘡物ハ、其稠韃布ノ如ク、自ラ義膜ト異ナリ、且深ク粘膜ノ小囊中ニ陷沒シテ、義膜ノ如ク突出セ_瘡ス、一目シテ以テ兩病ヲ區別スルニ足ルナリ、但シ實弗的里亞流行ノ際ハ、單純咽喉炎ヲ見ルト多シ、是レ猶、虎狼痢流行ノ際ハ、單純下利ヲ見ルト多キト一般ナリ、醫家能ク本眞實弗的里亞ト、單純咽喉炎トヲ錯視スルヲ勿ルヘキナリ、實弗的里亞ノ喉頭ヲ侵ス者ト、真格魯烏布トハ、似テ全ク非ナル者ナレハ、能ク診別セサル可ラ

ス、實弗的里性喉頭炎ハ、之ヲ格魯烏弗ニ比スレ
 ハ、頸部淋巴腺ノ腫大、及鼻涕流溢スルヲ多ク、且
 喉頭ノ炎證ハ、常ニ必ス咽頭炎ヲ發スルノ後ニ
 在リ、夫ノ義膜ノ如キモ、先ニ咽頭ニ發シテ、後喉
 頭ニ蔓延スルナリ、真格魯烏弗ニ於テハ然ラス、
 最初先ツ喉頭炎ヲ發シテ、而後咽頭炎ヲ發スル
 ナリ、然レモ亦實弗的里亞流行ノ際ハ、初發ノ證
 候、全ク真格魯烏弗ナル者、變シテ實弗的里亞ト
 爲ルヲアリ、蓋シ此變化ハ、真格魯烏弗ニ局ル者
 ニ非ラス、麻疹、痘瘡、猩紅熱ノ如キモ、實弗的里亞

流行ノ際ハ、義膜ヲ生シテ本病ニ變スルヲアリ
 ト云フ、余弟松山誠ニガ、曾テ醫事新誌中ニ掲載
 セシ義膜性格魯烏弗ト、實弗的里亞トノ區別表
 ナ抄載シ、以テ讀者ニ便ス、但シ此表ハ、普氏ノ論
 說中ヨリ、其要領ヲ摘譯セシ者ナリ

格魯烏弗

實弗的里亞

獨發スルヲ常トス、絶テ	常ニ流行ス、傳染スルヲ
流行セス	アリ
二歳以下ノ兒ニ發スル	老幼ヲ問ハスシテ發ス、
一罕ナリ、七歳以上ノ者	

ニハ絶テ發セス	局所病ニシテ、熱候ハ續發證候ト看做スヘシ	患兒窒息シテ死ス	口峽、前後鼻孔及肛門、陰門ニ滲出物ヲ現サス	出血ナク麻痺ナシ、又水脈腺變狀ノ著シキヲ見	熱病ト稱ス可キ者ナリ。	局所ノ變狀ハ、則チ證候ト謂フ可キノミ	患者衰脫ニ由テ斃ル、喉頭ニ變狀ナキ者ナリ	口峽、前後鼻孔及肛門、陰門ニ滲出物ヲ現ス	水脈腺變大シ、時アリテ化膿シ、出血アリ、麻痺アリ
---------	----------------------	----------	-----------------------	-----------------------	-------------	--------------------	----------------------	----------------------	--------------------------

ス
此他又諸般ノ咽頭潰爛、殊ニ白色ノ膿液ヲ澱着スル者ハ、甚ダ實弗的里性義膜ニ類似シ、以テ庸醫ノ眼ヲ欺クヲアリ、必ス憚セラ、ルヲ勿レ、賓禮遜氏診斷書ニ云、加答兒性潰爛ハ、屢扁桃腺、軟口蓋或ハ咽頭ニ生スルヲアリ、猩紅熱、及痘瘡ノ爲メニ發スル潰爛モ、亦然リトス、然レモ二病ノ如キハ、皮膚ノ發疹ヲ以テ、診斷誤ルヲナシト、前文記セシカ如ク、實弗的里性義膜ハ、粘膜ノ表面ノミナラス、其實質中ノ滲出物ナレハ、自ラ粘膜

面ヨリ高ク豊凸シ、潰爛ハ何種ヲ問ハス、粘膜面ヨリ低ク陷凹スル者ナリ、醫家知ラサル可ラス

治法

總テ疾病ハ、其原因、病理ヲ明ニスルニアラサレハ、一定ノ治法ヲ定ムルヲ能ハサルナリ、實弗的里亞ノ如キハ、前文原因條下、及病理條下ニ論載セシカ如ク、未タ一定ノ説ナケレハ、從テ其治法モ亦各醫ノ主張スル所各異ニシテ、更ニ一定セサルナリ、全身病説ヲ主張スル説ニ據レハ、實弗的里亞ノ局所ノ病狀ハ、蔓延スル者ニ非ラス、其

諸部ニ延展スル所以ハ、全ク内部血質ノ病機ニ由テ然ル者ナリ、故ニ全身治法ハ効アリト雖モ、局所療法ハ決シテ局所ノ病害ヲ防制スル者ニ非ラスト云ヒ、局所病説ヲ主張スル説ニ據レハ、實弗的里亞ハ、其原因何如ニ拘ラス、臨床ノ實驗ヲ以テスレハ、病ノ輕重ハ、全ク局所患害ノ劇易ニ由ル者ナリ、故ニ適宜ノ局所療法ヲ施シテ、早ク炎症ヲ抑制スレハ、從テ其蔓延ヲ防止シ、且滲出物ヲ預防シ得ルナリ、又此局所療法ヲ施ハ、義膜ノ喉頭ニ蔓延スルヲ防キ、加之全身ノ血毒證

ナ未發ニ預防スル者ナリト云ヘリ。畢竟全身病
說家ハ、自ラ局所療法ヲ輕視シテ、全身療法ヲ專
務トシ、又局所病說家ハ、自ラ局所療法ニ專任シ
テ、全身治法ヲ蔑視スルノ弊ナキト能ハス。吾人
現今ノ學識及經驗ヲ以テ考フレハ、局所并ニ全
身療法共ニ偏重スルトナク、專ラ兩種ノ醫法ヲ
施シテ、治病ヲ專務トス可キナリ
尼墨兒氏ハ、義膜ヲ剝離シテ、其痕ヲ拭ヒ乾シ、而
後其面ニ強硝酸銀液ヲ塗抹スルノ一法ヲ主張
セリ。然レモ斬新ノ醫法ニ據レハ、古來慣用セシ

局所燒燂法及刺戟療法ハ、盡皆之ヲ廢シ、唯局所
ニハ緩和防腐ノ諸品ヲ施用ス可シト云ヘリ。米
醫殊ニ普林篤氏ノ如キハ、固形硝酸銀、強硝酸銀
水、鹽酸、硫酸銅、明礬、及格魯兒鉄ヲ反覆局所ニ貼
用スルハ、頗ル過劇ノ療法ニシテ、些モ効ナキ者
ナリト云ヒ、格魯兒酸剝篤亞斯、或ハ硝酸剝篤亞
斯ノ含嗽藥ヲ賞用セリ、或ハ患兒嬰弱ニシテ、含
嗽スルト能ハサル者ニハ、氷片ヲ口内ニ置テ徐
々ニ融解セシムルモ亦可ナリト云フ。博士默篤
加兒布氏ハ、呼息惡息ヲ帶フル者ニ、稀格魯兒化

曹達水、或ハ沃化溴素二川ヲ、護謨漿一汚ニ混和セル者ヲ、毛筆ニテ局所ニ塗敷スルノ一法ヲ賞賛セリ、又結列屋曹篤、或ハ石炭酸ノ稀溶水モ、防腐ノ効アル者ナリ、時アリテ緩収斂藥ノ有効ナルヲアリ、殊ニ單寧酸里斯林ヲ妙トス、又原因條下ニ論セシカ如ク、實弗的里亞ノ義膜ニハ、所謂「バクテリアヤ」若クハ小菌類ヲ含有スルノ説アリ、故ニ次亞硫酸曹達ハ、有効ナリト云フ者アリ、余ハ未タ之ヲ試用セサルヲ以テ、其効否何如ヲ知ラスト雖モ、理ニ於テ有効ナル可キナリ、之ヲ用

フルニハ、次亞硫酸曹達三号ヲ、里斯林二汚及淨水六汚ニ混和シ、用ニ供スト云フ、余曾テ英國ノ醫學新聞中ニ一見セシ法ハ、載セテ西醫雜報第一三號ニ在リ、其法ノ要領ハ、則チ大量ノ格魯兒酸刺篤亞斯ヲ内用シ、兼テ抱水格魯刺爾ノ里斯林溶液ヲ、局所ニ塗敷スルナリ、又醫學雜誌第二十四號ニ掲載セル、杉田玄端翁ノ投書ヲ參看ス可シ

本病ハ其初或ハ局所病ナルモ、或ハ全身病ナルモ、其先後ニ關セス、必ス全身ノ虛脫ヲ致ス者ナ

レハ、強壯、衝動、滋補ノ治法モ、亦欠ク可ラス、就中
規尼涅格魯兒鉄、格魯兒酸、刺篤亞斯ハ、最モ有効
ナリ、又碩學雀村、及抹哥兒ノ二氏ハ、過滿俺酸、刺
篤亞斯ノ内用ヲ賞セリ、其方過滿俺酸、刺篤亞斯
一沼ヲ、水一巴半ニ溶和シ、每服一茶匙ツ、三時
間毎ニ用フルナリ、此他亞兒個爾性衝動藥ハ、他
ノ熱病ニ於ケルカ如ク、本病ニ於テモ亦須要ノ
一品ナリ、滋養品ニハ、牛乳、雞卵、雞肉茶、牛肉茶等
ヲ撰用ス可シ、原來虛衰ニ陷ルノ恐レアルヲ以
テ、滋養品ヲ必要トスレモ、何如セン患兒大抵之

ヲ嫌ヒ、強テ之ヲ與フレハ、嘔吐ヲ發シ、遂ニ饑餓
シテ死スル者アリ、憐ム可キニ非ラスヤ、知友某
ノ兒、曾テ箇ノ憐ム可キ證狀ヲ發シ、遂ニ仙臺ニ
趣キシトアリ、悲哉嗚呼
學士斯密私氏ハ、左方ヲ稱用シ、全ク之ニ依頼ス
ル者ノ如シ

外用方

石炭酸 六滴至十滴 次亞硫酸鐵液 三 里斯林 一
右混和、二三時間、毎ニ、大軟毛筆ヲ以テ、之ヲ咽
頭ニ塗付ス

内用方

格魯兒酸剝篤亞斯一丁至 格魯兒鉄丁幾一

單舍利別四

右混和、每服半茶匙ツ、一時毎ニ用フ

丹涅兒氏内科全書ニ曰、余ハ本病初期ノ患者ニ
遭ハ、最初先ツ吐根及安母尼亞ヲ與ヘテ、吐ヲ取
リ、次ヲ亞兒加里性飲料ヲ投シ、常ニ偉効ヲ収メ
タリ、然レモ患者己ニ衰弱ノ徴ヲ現シ、出血ノ虞
アル者、及尿中蛋白質ヲ含有スル者ニハ、速ニ格
魯兒鉄丁幾ヲ與ヘ、且之ニ規尼涅ヲ配伍シテ、効

ヲ取リシコアリ、又纖維性血塊ヲ生スルノ恐ア
ル者ニハ、安母尼亞、及機那皮ヲ、鉄丁幾ニ代ヘ用
井、或ハ之ニ鴉片ヲ配合シ用フ可シト、又曰本病
患者ハ、常ニフヲ子ルノ襪衣ヲ着テ、褥中ニ安臥
温覆シ、病室ニハ、華氏七十度ノ温度ヲ保シ、爐中
常ニ湯ヲ沸カシテ、其蒸氣ヲ室内ニ散漫セシム
可シト、蓋シ斯ク蒸氣ヲ散漫セシムレハ、空氣常
ニ滋濡セルヲ以テ、義膜溶解ノ機ヲ促スノ効アリ、
最モ簡易ノ法ニシテ最モ有要ナル者ナリ、余
ハ常ニ本病患者ヲ療スル毎ニ、病家ニ諭シテ此

法ヲ行ハシムルナリ
 實弗的里亞ノ喉頭ヲ侵ス者ニ於テモ、亦其治療
 ノ大眼目ハ、前述ノ治法ト異ナルコトナシト雖モ、
 唯真格魯烏布ニ於ケルカ如ク、力所及速ニ喉内
 ノ義膜ヲ脫離セシムルヲ專務トス可キナリ、然
 リ而シテ此目的ヲ達スルニハ、温蒸氣ノ吸引ヲ最
 良トス、余カ頃日譯著スル所ノ内科約説發免ニ
 曰、凡ソ實弗的里亞ハ、自然良能ノ妙機ニ由テ、漸
 ク化膿ヲ起シ、以テ治癒ニ至ル者ナリト、又曰義
 膜モ、亦此良能ニ由テ剝離スル者ナリト、阿爾垓

爾氏ハ、此自然良能ノ治法ニ基キ、半時毎ニ、十五
 分時間ツ、絶ヘス温蒸氣ヲ吸引セシメ、之ニ由
 テ大ニ化膿ヲ催進スルノ一法ヲ意匠セリ、又内
 科摘要ニハ、石灰水ノ蒸氣ヲ吸引セシメ、或ハ適
 宜ノ吸引器ヲ用テ、石灰分子ヲ吸入セシムルノ
 法ヲ試用ス可シト云ヘリ、此他詳細ノ治法ハ、尋
 常格魯烏布ト相異ナルコトナシ、故ニ本編餘地ナ
 キヲ以テ、之ヲ贅セス
 喉頭若クハ氣管ノ截開術ハ、患兒將ニ窒息セン
 トスルノ恐アレハ、速ニ之ヲ施サ、ル可ラス、猶

預シテ時期ヲ失スレハ、効ナキナリ。蓋シ此二術ハ、或ハ之ヲ賞賛スル者アリ、或ハ之ヲ擯斥スル者アリ、未タ必効ヲ期シ難キナリ。内科摘要格魯烏弗條下ニ詳論アリ。此他本病傍發ノ諸證ハ、適宜ノ姑息療法ヲ施シテ、之ヲ防制ス可シ。嘔吐甚シキ者ニハ、硝酸蒼鉛、蓿酸攝留謨、結列屋曹篤、或ハ稀青酸ヲ與ヘ、下利ニハ鴉片、及収斂藥ヲ投シ、煩悶不安ノ證ニハ、鴉片、蒲魯抹度剝篤亞斯、抱水格魯刺兒等ヲ、輕量ニ服用セシメ、出血スル者ニハ、内外止血藥ヲ用フ

可シ、繼發性麻痺ニハ、電氣ヲ施用シテ可ナリ、西人モ亦之ヲ稱用ス、然レモ此麻痺ハ、普氏ノ說ノ如ク、一時ノ證ニシテ、數月ノ後ハ自然ニ平復スル者ナレハ、余ハ電氣ヲ要セス、磷酸鉄舍利別、番木髓丁幾、或ハ磷酸鉄加里沙斯篤里規尼涅越里幾失兒ヲ與ヘテ足レリトスルナリ。余カ家父祖ノ代ヨリ、一種ノ治法ヲ以テ、本病ヲ療ス、實際上効アル者ニ似タリ、然レモ未タ其効アル所以ノ理ヲ究ムルヲ能ハサルナリ、余不才ト雖モ方今其理ヲ探偵スルニ汲々タルナリ、異

日若シ素志ヲ達シ、其理ヲ究明スルコトヲ得ハ、之ヲ本編ノ附録ト爲シ、以テ識者ノ評論ヲ乞ヒ、併テ實地家ノ試験ヲ煩ハサント欲スルナリ

預防

上文縷述スルカ如ク、實弗的里亞ハ、其病理、原因、未タ一定ノ論ナク、且其傳染病ナルヤ否、之ヲ疑フ者アルナリ、故ニ洋書別ニ預防法ヲ論スル者ナク、偶之アルモ患者ニ直接ス可ラス、惡臭ノ呼氣ヲ吸引ス可ラスト云フニ過キサルナリ、然ルニ一千八百七十六年刊行、學士斯密私氏著ノ小

兒病論中ニ、本病ノ預防法ヲ論載セリ、左ニ之ヲ摘譯シテ讀者ノ一察ニ供ス
實弗的里亞流行ノ際ハ、小兒ノ微恙アル者、殊ニ發熱、若クハ流涕スル者ハ、須ク注意ヲ要スルナリ、假令咽喉ノ疼痛ヲ訴ヘサルモ、能ク口内ヲ點檢ス可シ、若シ咽頭少シク赤色ヲ呈スレハ、速ニ格魯兒酸剝篤亞斯ノ含嗽劑ヲ施用セサル可ラス、或ハ患兒幼稚ニシテ、含嗽シ能ハサル者ニハ、本品ヲ小量ニ内服セシム可シ、但シ用量ハ、毎時間、或ハ二時間毎ニ、每服二氏、至四氏ニ過キサル

ヲ要スルナリ。若シ又咽喉ノ赤色顯著ニシテ、殊ニ扁桃腺上、小白點ヲ見レハ、其粘液ナレカ、將滲出物ナルカニ論ナク、速ニ格魯兒酸剝篤亞斯ノ含嗽ヲ行ヒ且治法條下ニ論載セル石炭酸水ヲ以テ、一日二三回、若クハ數回、局所ヲ洗淨ス可シ。是ヲ最良ノ預防法トス。一家族ノ内、若シ實弗的里亞ニ罹ル者アレハ、之ヲ別室ニ隔居セシメ、他人ノ交通ヲ絶ツ可キハ、論ナク其他健康ノ兒輩モ、日々口内ヲ検査ス可シ。若シ炎證ノ徵アルヲ認メハ、適應ノ治法ヲ處

ス可キナリ。如斯未萌ニ預防スレハ、夫ノ瘴猛ナル實弗的里亞モ、亦恐ルニ足ラサルナリ。規尼涅ハ、本病ヲ預防スルノ効アリト云フ者アリ。余カ實驗中又本品預防ノ効ヲ奏セシ例ナキニ非ラスト。雖モ、余ハ其効驗アルヲ保證スルヲ能ハサルナリ。之ニ反シテ上記ノ預防法ハ、細心ニ之ヲ行ヘハ、必ス効驗アルヲ余カ確保スル所ナリ。

實非的里亞論

明治十二年
二月廿五日
出版御届

定價金貳拾貳錢

編述兼出版人

東京芝區三田三丁目十二番地

新宮涼園

東京日本橋通三丁目

丸屋善七

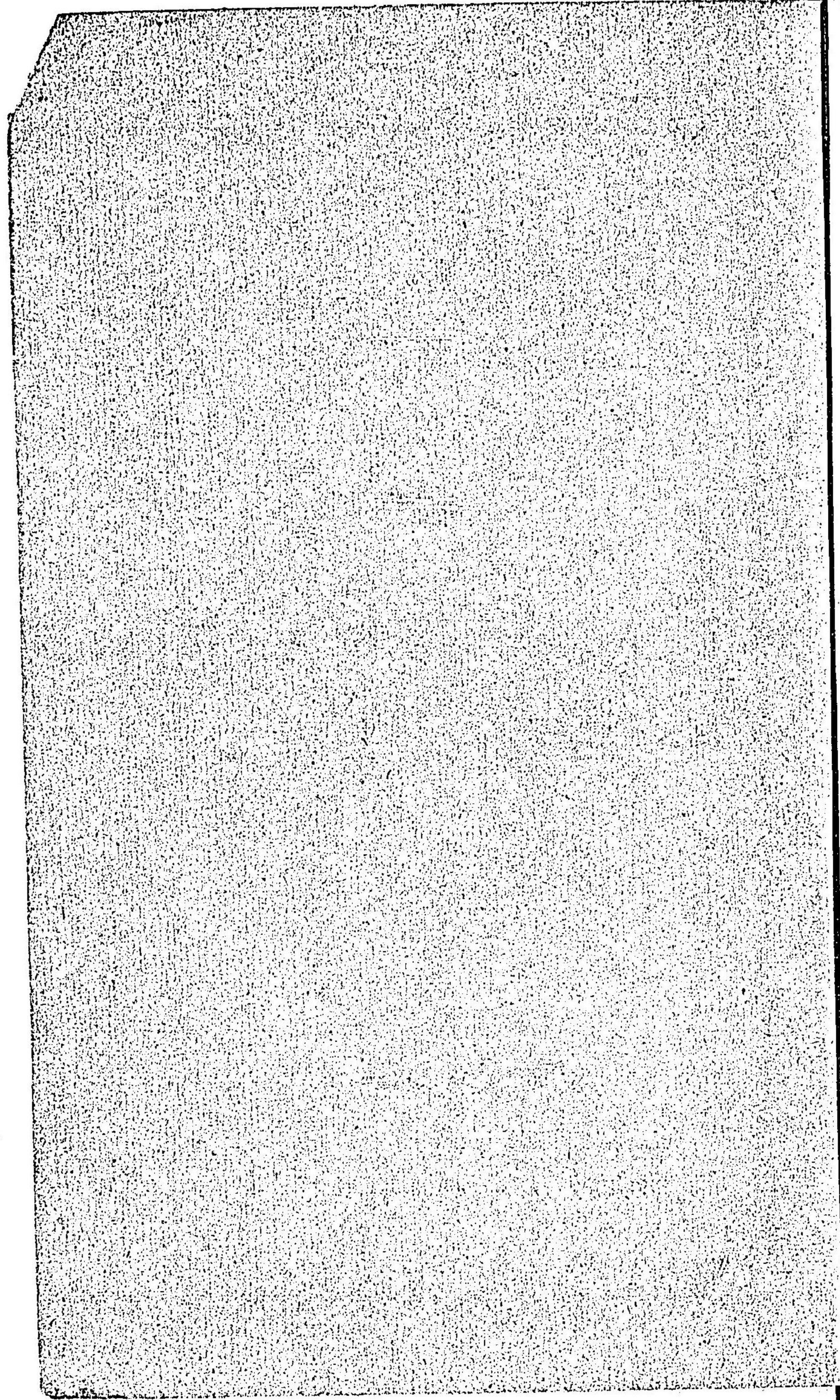
同馬喰町三丁目

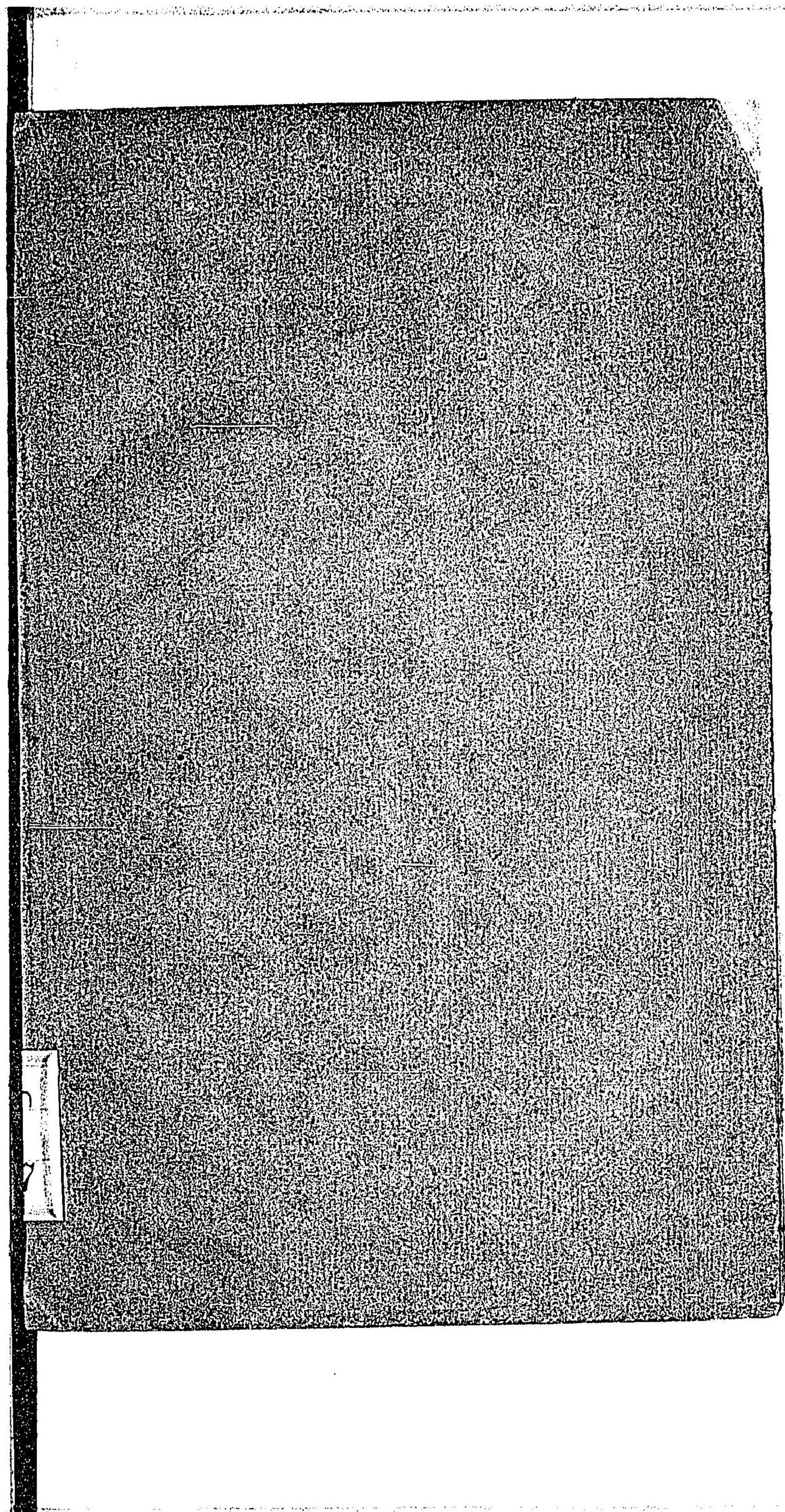
島村利助

西京二條通柳馬場東

若林茂助

發賣書肆





3
260

新宮涼園編述

實弗的里亞論

完

起號堂藏版

059315-000-6

特30-707

實弗的里亞論

新宮 涼園/編

M12

CBF-0175

